故稱檀君。今從通鑒及麗志。

〔疆界誌〕「前朝鮮」。壇君名王儉。（史記作險）初降太伯山頂神壇樹下。國人立爲君。國號朝鮮。起唐堯二十五年戊辰。止周武王元年己卯。凡一千二百二十一年。（柳磻溪磻遠。及輿地志云。太伯山。在今寧邊府。而今妙香山。）

恐按。三國遺事。神檀。作神壇。檀君。作壇君。蓋三國遺事。東方始出之史。而以神字觀之。壇之壇。較是矣。神壇之壇。雖作檀。而檀木有二種。一紫檀。有香。一俗名朴達木。堅緻中材用。太伯山多紫檀。故名以妙香山。在太伯山下人。以紫檀爲檀君之檀。江東縣之鎭山。曰大朴山。下有一塚。世傳檀君墓。大朴。卽朴達也。而以有壇君墓。而名之也。（輿覽云。大朴山。在縣北四里鎭山。）

舊鈔本慈鎭和尙傳

文學士　神田喜一郎

我が鎌倉時代の佛敎の中、殊に法然及親鸞の二高僧を中心として、淨土敎の歷史的研究を試みることは、近時著しく世の國史家の興味を惹きつゝあるが如し。これ固り種々の理由に本くものなるべきも、亦一は法然親鸞に關して從來傳へられたる所の事實が、淨土宗或は眞宗の敎徒によりて自己の宗門を粉飾せんが爲に各々都合よき潤色を施れし形迹を存し、其學術的見地よりは猶幾多嚴密なる批判を要すべきものなるに職由せずんばあらず。而して是に於てか之が根本史料の搜索蒐集尤

も盛に行れ、最近には法然の門流を汲める敬西房信瑞の著作に係る「明義進行集」の發見あり、方に學者の注意をあつめつゝあるが如し。然るに予は又茲に法然親鸞と尤も因緣の淺からざりし慈鎭和尙に關して、從來全く世に知られざりし一史料を紹介せんとす。

其の史料とは卽ち本文の題目に揭げし舊鈔本「慈鎭和尙傳」にして、予が先王父の蒐集せし古刻舊鈔の一に屬し、現に予が插架に藏するもの是なり。そは全卷約二丈に及ぶ一卷子本にして、首尾完全なるが、其贐題に

慈鎭和尙傳　三卷之內三　　青蓮藏

とあり。然れば青蓮院の舊藏に係り、原三卷ありしものなるを知るべし。今その亡失せる二卷が果して如何なることを書けるものなりしや、之を知るに由なきも、現存の一卷に就いて見ると、卷首には、

慈鎭和尙傳

とあるのみにして、寫眞參看第三卷との卷第なく、且其文首尾貫通して慈鎭和尙が一代の行事を完載したり。予が友岩橋小彌太君の言ふ所に據れば、青蓮院に「慈鎭和尙傳」と題する舊鈔本二卷を藏し、現に東京帝國大學の史料編纂係にある由なれば、或は予の藏するものと合せて原の三卷となるべきものやも計られず。されど兎も角予の藏する一卷にて慈鎭和尙が一代の行事の完載せられたるは喜ぶべし。而して其の卷尾には、

正應二年七月三日書寫了

校合了

とあり。寫眞參看其の書寫の年代、正に慈鎭和尙の示寂せる嘉祿元年を距ること僅に六十四年に過ぎざるを知るべし。又其本文を案ずるに、慈鎭和尙の示寂のことを記せる下に、

本師釋尊入滅之昔、阿難結集一代之聖敎、

慈鎭和尙傳卷首

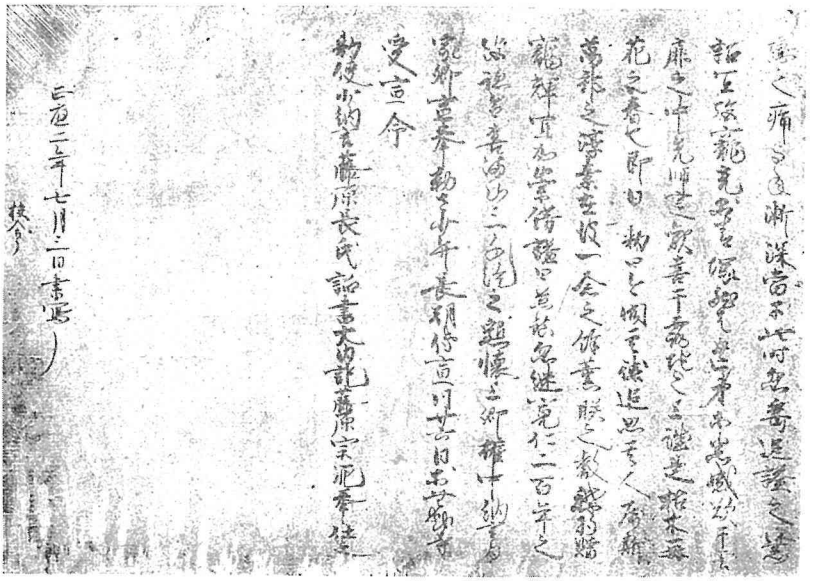
先師和尙卽世之今、遺弟讃歎一生之行狀、仍不加華詞、聊所述實錄也、

とあり。此「慈鎭和尙傳」が何人の手に成れるか、之によりてほゞ推測し得べく、又此傳が慈鎭和尙の傳として、殆ど現存最古の且最も信據するに足るものなるべきことを知るべし。

意ふに慈鎭和尙の傳は、諸書に所見尠からざるが、師蘐の「本朝高僧傳」卷五十四に見えたるもの尤も詳細を極めり。然るに此の舊鈔本「慈鎭和尙傳」とは其詳細の程度比較すべくもあらず。乃ち今一例として慈鎭和尙の示寂に關する二書の記事を鈔出して、其間如何に精粗の差あるかを示し、以て聊か讀者の參考に供せんとす。

本朝高僧傳

嘉祿元年、於小島房、香湯休浴、著新淨衣、拜佛舍利、命聖增唱佛語、中夜結秘印、誦密咒、右脇而寂、行年七十一、法臘五十九、火浴收



慈鎮和尚傳卷末

骨於無動寺嶺、

舊鈔本慈鎮和尚傳

嘉祿二年九月廿五日酉剋、洗浴香湯、著新淨衣、盥漱、奉請佛舍利出之、以右手取之、當雙眼拜之、其後安置机上、舍利讃嘆畢、頌伽陀衆見我滅度一行、願以此功德一行、念聖增律師令頌之、頌文畢、釋迦寶號唱之、慈賢僧都祐眞律師聖增律師證空上人等也、僧正和尚德同列、此中西山竹園遲枉華駕、已及亥刻、爾時結秘印誦眞言、北首右脇、寂然唱滅、證空上人唱釋迦寶號、聖增律師打金磬、年七十一、僧齄六十、嗟呼鳥之將死、其鳴也哀、人將死、其言也善、蓋此謂也、

以上の二書の記事の中、舊鈔本「慈鎮和尚傳」が和尚の示寂を以て嘉祿二年と爲せるは、意ふに「本朝高僧傳」の嘉祿元年となせるの正しきに及ばるべきも、他は皆舊鈔本「慈鎮和尚傳」を以て精と爲

すべし。而して殊に慈鎮和尙の示寂に際し、其座に淨土西山派の祖たる證空上人の在りしといふが如き、從來殆ど模糊たりし慈鎮和尙と證空上人との關係に、正に炬火を投ずるものとして珍重すべし。

猶此の舊鈔本「慈鎮和尙傳」の本文に就きて、一々之を仔細に尋繹檢覈せば、更に得る所多かるべきことは殆ど疑を容れず。然るに予は素り國史を專攻する者にもあらず、自ら其任に非ることを知れば、乃ち今は姑らく一言紹介を試みるのみ。若し其本文の全部の發表の如きは、夙に畏友橋川正君の切なる慫慂あり、將に近日を以て之を世に公にし、橋川君並に世の國史家の精細なる研究を待たすとす。（完）

西印度ナーシックに於けるゴータミープトラ窟に就て（下）

文學士　澤村專太郎

四

この窟院の建築的裝飾の意匠は、すべて其前面の外部に集注せられてゐる。もと洞窟はその性質に於て中空に屋蓋を投現するが如き事の出來難い事情にあるから、その外形上に美觀を發揮する事は、その前面に限局せられてゐるのである。從つて洞窟前面に於て建築上の外觀美を保持せむとす